

「新聞への意見投稿」 平成25年度掲載文の紹介

※ 東京新聞 「発言」 平成25年4月17日（水）掲載

『イジリ』はほどほどに」 2年女子

以前、本欄で学校内の「イジリ」と「イジメ」について取り上げられていた。私のクラスにも「いじられキャラ」と呼ばれる友達がいる。彼は変なあだ名でみんなから呼ばれているが、いつも楽しそうにしている。

私は本当に楽しいのだろうかかと疑問だ。テレビで、こうしたいじられやすいキャラクターの人たちが、イジリが激しくなってくると苦しい、と話していた。私もそう思う。

自分への扱い方がひどくなってくるのは悲しいだろう。でも、みんなが楽しいと思っているので、自分のキャラを変えない優しい人たちなのだ。

学級内に、こういうキャラがいると盛り上がる。しかし、限度は超さないようにしなくてはならない。イジリとイジメは紙一重だ。互いに相手の立ち位置やキャラを尊重し合うことが大切だ。自分のキャラにとらわれすぎる必要もない。

※ 毎日新聞「みんなの広場」平成25年5月16日（木）掲載

「官邸の見学会に行ってみよう」 3年男子

最近の新聞で子どもたちに首相官邸を公開することを決定したという記事に興味をもった。一般公開するねらいには、国会と並ぶ政治の中心を日本の将来を担う子どもたちに感じてほしいというのがある。主な公開場所は、官邸の大ホールと記者会見場、それに公邸である。公邸の屋上には4羽のミミズクの彫刻があるらしい。

官邸にはたくさんの秘密があるようだ。私がもし見学できたなら、記者会見場の内閣官房長官が話している台に立ってみよう。

最近の政治家は、テレビや国会でやじを飛ばす映像が流れるなど、マイナスイメージがある。だから私は政治家にはあまりいいイメージをもっていない。この見学会を通して、政治家がどのような所で何をしているのか見てみたいと感じた。もし行けるならば、社会勉強の一つとしてこの見学会に行き、いろいろなことを学びたい。

※ 東京新聞「若者の声」平成25年5月18日（水）掲載

「英語教育は小学生から」 3年男子

小学生のうちから英会話を習得している子どもが増えている、という新聞記事を見て正直驚いた。中学3年レベルの英語の文法を小学5、6年生で教わっているからである。

私も小さいころに英会話を習っていた。楽しかったが、どんな会話をしたかはあまり覚えていない。だが、中学校に入学し、再び英語を勉強することになった時、小さいころに英語の楽しさを学んでいたことが幸いし、得意科目になった。

だから、小学生のうちから英会話をするのはよいことだ。その結果、英会話が自分の趣味になったり、外国で働くようになった時に、ネイティブな英語を使えたりする。

今はグローバル社会である。日本人も海外に出て働かなければならない。私もグローバル社会に追いつけるように英語を習得できるように努力したい。

※ 東京新聞「発言」平成25年5月21日（火）掲載

「進んで寄付 見習いたい」 3年男子

僕は先日、ボーイスカウトの活動として募金をした。多くの方が募金をしてくれたが、中でも高齢の方の割合がとて多かった。目的はどちらかというと、一生懸命に声を掛ける子どもの笑顔が見たいからなのだろう。しかし、自分の利益を気にせず、少しでも募金しようという純粋な気持ちは素晴らしいと思った。

僕の学校でも生徒会主催の募金活動を行っている。今はできるだけ1回は募金するようにしている。でも昔はあまり積極的に募金しようとは思っていなかった。小遣いが減るのが嫌だと思っていた。普通は誰でも僕と同じように思っていることが多いだろう。

だが、募金活動を通じて自分の利益を気にしない人間は素晴らしいと思うようになった。今年も学校で募金活動がある。街にも募金ができる場所が多い。そのような場所を見つけたら、少しでもいいから募金をして協力したい。社会に少しでも貢献したい。

※ 毎日新聞「みんなの広場」平成25年5月26日（日）掲載

「生の交響楽団演奏に感激」 3年男子

先日、僕の学校は区が主催する連合音楽会に行ってきた。なんと東京フィルハーモニー交響楽団の演奏を聴くことができた。楽団員がそれぞれの楽器の説明もしてくれた。とても分かりやすかったし、プロの演奏を聴くのは初めてだったので感激してしまった。

僕はラジオでもたまにクラシック音楽を聴く。その中には東フィルの演奏による音楽もあったりするが、このように全国的に活躍している楽団の、生の演奏を聴くことができたのはとても貴重だ。一番印象深かったことは、オーケストラの演奏が響きとして伝わってきたことである。生の演奏と放送の違いは、こういうことなのかと初めて分かった。

昨年は劇団の演劇を鑑賞する会があった。貴重な体験が何度もあり、生の芸術に触れることができ、本当にうれしい。こういう機会を大切にしていき、これからも忘れないようにしたい。そして大人になったら、自分でもこのような演奏を聴きに行こうと思う。

※ 毎日新聞「みんなの広場」平成25年6月6日（木）掲載

「相手を知り集団で高める」 3年男子

先日、僕たち3年生にとって最後の運動会があった。1クラス31人が息を合わせ、5分間で跳んだ回数を競う。練習を始めたころは、互いにいらついた雰囲気にもなった。その雰囲気を明るくしていたのは、失敗した時の声かけだった。縄が止まってしまうと、「ドンマイ」「頑張れ」「足を上げよう」と大きな声で言い合った。その結果、5分間で216回跳ぶことができたのだ。

集団というのは、うまくいかないと相手を責めたり、責任を抱え込んだりしがちだ。だが、批判だけでは何事もうまくいかない。成長するチームやグループは、それぞれが相手のことを考えて発言する。相手が嫌な気持ちにならないように考えることは大変だし、難しい。けれど、それができればもっと多くの考えを知ることができる。

簡単にできることではないかもしれないが、僕も相手を知ることからさまざまなことを考えていきたい。

※ 東京新聞「発言」平成25年6月7日（金）掲載

「発想豊かな小学生驚き」 3年男子

部活動で先日、科学技術館で行われたワークショップのお手伝いをした。そのワークショップは主に小学1～4年生が対象で、テーマは「水圧を感じよう」というものだ。まだ水圧を知らない小学生に身近に水圧を感じてもらいたいねらいがある。

このワークショップ中に驚きをもったことが一つある。それは、小学生の発想の豊かさである。まだ水圧が生じる原因を知らないのだから、実験を通して原因を探ろうとする。その時の発想力が豊かなのである。例えば、「容器が軽いから」とか「浮力によって」などなど。さまざまな視点から探す努力をしていて驚いた。

中学生になると、少しずつ固定観念が生まれてくる。だから、発想の枝分かれがどうしても狭くなっていく。このワークショップを通じて、固定観念を取り払って小学生のように一から考えることが今の私には必要である。慣れない手伝いでとても疲れたが、小学生と一緒にすがすがしい1日だった。

※ 毎日新聞「みんなの広場」平成25年6月18日（火）掲載

「毎日を大事に生きていきたい」 3年女子

先日、私の学校で、「命の大切さを学ぶ教室」として、通り魔事件の被害者の家族の方にお話をうかがった。数年前に起きた、ある通り魔事件についての話を聞いて改めて感じたことが二つある。

まず、人は一人ではないということだ。事件があった時の気持ちを講師の方が語ってくれた。その中に忘れられない言葉があった。

「命は共有物。その人に何かがあればその周りの人も悲しいのだ」と。命はその人だけでなく、その周りの人のものでもある。誰かがその大切な命や人生を奪う資格などない。あるわけがない。

また、普段から「死ね」などと軽々しく口にしてはいないだろうか。「もし、その人に何かあったら・・・」と思う。きちんと言葉の重みを理解すべきだ。そして、私はいつ何が起きかわからないこれからの毎日を大事に生きていこうと強く思った。

※ 毎日新聞「みんなの広場」平成25年7月7日（日）掲載

「私が落ち着いて考える場所」 1年女子

中学生になった私が、落ち着く場所は自分が住んでいるマンションの屋上です。

夕方には真っ赤な富士山、夜には星空が見えます。そこで私は、一つのことを学びました。それは「考える幅が広がった」ということです。深く物事を考えることが苦手だったのですが、夕日で真っ赤に染まった富士山を見ると「なぜ赤いのだろう」から「こうなのかな?」「それともこう?」と想像するようになりました。

この自然の雄大さは、私の心を大きく変えました。だから私は、気分転換したい時、いつもマンションの屋上に行きます。その場所は自分の考えを改められる原点だと思っています。考えごとに行き詰った時にマンションの屋上は私にとって、とても大切な場所です。これからも物事をじっくりと考え、考える幅も広げていきたいです。中学生になって少し大人になったように思います。

※ 毎日新聞「みんなの広場」平成25年9月26日（木）掲載

「修学旅行は飛躍への起爆剤」 3年男子

晴天に恵まれ、京都への2泊3日の修学旅行はとても有意義に過ごせた。修学旅行は何のためにあるのかと、帰ってから考えた。学を修めるとはどういうことなのか、自分なりに考え、二つの理由を見いだした。

一つは、中学校で学んだことをフルに活用するためだ。1年生では八ヶ岳移動教室、2年生では鎌倉校外学習に行った。これらは登山や古都の歴史を楽しみつつ、社会に出ていくために重要なマナーを体感させるためにあるのだろう。

もう一つは、自立である。修学旅行のほとんどが班活動だったので、これまでの学校生活のすべてが試される。特に私が調べた竜安寺は石庭が実際に見た方が美しかった。今でも忘れられない。

修学旅行は、自分にとってさらなる飛躍となる起爆剤になった。修学旅行の目的を理解し、将来へとつなげられるようにしたい。

※ 東京新聞「発言」平成25年9月27日（金）掲載

「修学旅行で多く学んだ」 3年女子

私にとって京都は、先日の修学旅行で二回目となった。今回の京都はちょっと違った面白さがあった。例えば清水寺である。景色などを楽しむとともにその時代背景を知った。自分がまるでそこにいたかのように感じた。

今回は寺や景色よりも縁結びで有名な地主神社やお土産などがメインとなった。友達といると、前回気が付かなかったような面白い発見ができる。考えもしなかった疑問を持つこともできた。

お土産屋さんを回っているときには、「昔の人はこんなににぎやかになるなんて考えていただろうか」と現代から客観的に思いを巡らせた。同じ場所でも行く人や視点が違くと、また別なことが考えられた。

わずかなことでも深く知ろうとすると、新たな発見につながる。私は修学旅行の目的を達成できた経験を生かして、これからの生活を豊かにし、充実させたい。

※ 毎日新聞「みんなの広場」平成25年9月28日（土）掲載

「トルコの事件から考えたこと」 3年男子

トルコで日本人女子学生が亡くなるという悲しい事件が起こった。トルコのイスタンブールとは、オリンピック招致で競っていたが、デモが起こったりして僕自身心配の多い国というイメージを持っていた。しかし、事件の数日後、たくさんのトルコ人が日本への謝罪の行進をしている映像を見た。日本に対し何と友好的なのだろう。世界を見ても、このような国はそうないはずだ。

現在は、世界各国の行き来がさかんになり、留学生も大勢いる。世界各地の素晴らしい所をたくさん知ることができるようになった。しかし、誰かが危険な目に遭うと、文化交流がしづらくなる原因になってしまう。

せっかくトルコは、日本に対して友好的なのに、今回の事件のようなことがあれば、そのいいところが台なしになる。世界の環境が整えられ、国際交流が活発になるよう僕もその活動に参加してみたい。

※ 東京新聞「発言」平成25年11月8日（金）掲載

「台風被害は油断で拡大」 3年男子

台風26号による伊豆大島の被害にはとても衝撃を受けた。今まで台風でこんな被害が出たのは見たことがない。台風はとても恐ろしいものだということを、あらためて感じた。

僕は5月に大島にキャンプに行った。その時には、被害のひどかった元町港も訪れた。そこはとても綺麗な町で、テレビや新聞に載る写真を見ても信じることができない。このように被害が大きかった理由として、避難勧告が遅れたということがあろう。

大島は逃げられる場所がないとはいえ、台風が来る前から避難をしていれば助かった人もいるというのだ。しかし、なぜそうしなかったのか。それには、人間の油断が関わっていると思う。この油断が被害の拡大につながったと思う。自分の命を守るためには、避難の時にいかに安全に行動するかが大切だ。そのために、日ごろの準備を徹底する。これしかないと思う。

※ 毎日新聞「みんなの広場」平成25年12月1日（日）掲載

「大切なのは忘れないこと」 1年女子

先日、道徳の授業で東日本大震災を経験した方のお話を聞いた。震災のときに一緒にいた友人がすぐそばで流されてしまったという悲しい経験を話してくれた。私は、日本で起きた身近な出来事の話はすなのにもものすごく遠いものを感じた。これはとても悲しいことだと思った。

私たちは日本で起きた悲しい出来事を知らなさすぎるのではないだろうか。このことは震災だけに限られることではない。もう、何十年も前に起きた太平洋戦争、広島や長崎に原爆が落とされた日にちを言える小中学生は5年後、10年後にはどのくらいいるのだろうか。

道徳の授業で話を聞いて、多くの人が何か自分にできることはないかと考えたはずだ。日本という同じ国で起きた悲しい出来事をよく知り、そして決して忘れない。このことが一番身近にできることで大切なことだと思う。だから私は大人になってもこのような出来事を絶対に忘れない。

※ 東京新聞「発言」平成25年12月3日（火）掲載

「いじられ役 友人の嘆き」 1年女子

いじめのニュースはいまだに絶えない。世間では「いじめをなくそう」と言われている。しかしその話を聞くと、いじめとは何だろう」と疑問に思う。

私の友達には「いじり役」と「いじられ役」がいる。いじられ役がふざけて、いじり役がそれを突っ込む。それによって笑いが生まれ、その場が和むということが多くある。

しかし、あるとき、そのいじられ役の友達が私に相談してきた。いじられ役は疲れた、いじられ役はもう嫌だという内容だった。私は今まで漫画によくあるような過酷なものがいじめだ、と自分の中で決めつけていた。だが、友達の話聞いたとき、これもいじめなのかもしれないと思った。

人は知らずのうちに人を傷つけていることがある。たとえその人に悪意がなくても、相手が傷ついたら、それはいじめではないか。そんな「見えないいじめ」で苦しむ人をこれ以上増やさないように、人はいつでも相手のことを思いやって生きていくべきだろう。

※ 毎日新聞「みんなの広場」平成25年12月4日（水）掲載

「命の重さは同じだ」 3年女子

最近、グローバル化も進み、外国との交流がとても深くなっている。海外旅行に行く人が多い。そんな中、外国で起こった事故に、日本人が巻き込まれることも少なくない。

そのような場合、ニュースでは「日本人の被害者は現在、確認されていない」と伝える。日本の国民として、自国民が事故に巻き込まれていた場合はその家族も関係するので、この情報は必要だと思う。しかし、「日本人が巻き込まれていなくてよかった」というニュアンスの言葉が、ニュース番組の出演者などの口から出ることがあり残念に思った。

本当にそうなのだろうか。もう少し上手な表現方法はないのだろうか。日本人の命も外国人の命も「命の重さ」は同じだ。亡くなった方がいれば、それを悲しむ遺族がいる。同じ痛みをもつ「人間」であり、国の違いなど関係ないのではないか。私は、国と国が手を取り合い、より幸せを願える関係になってほしいと強く感じる。

※ 東京新聞「発言」平成25年12月10日（火）掲載

「増えすぎる ゆるキャラ」 1年女子

「ゆるキャラさみっと」が先日、埼玉県羽生市で行われた。新聞記事に書かれたゆるキャラの数の驚き、興味を持った。ゆるキャラとは、地域おこしが主な目的であり、「ゆるいマスコットキャラクター」の略語だ。

ゆるキャラには幾つかの条件がある。特に「郷土愛に満ちあふれたもの」や「ユニークさがあるもの」などが重視されている。最近では動きやユニークさに多くの人がひきつけられてブームを巻き起こし、ゆるキャラの数が増加している。

しかし、多すぎるのは問題があると思う。集まったのは450体を超す。グランプリ参加だと千体以上もいるという。それはさすがに多すぎではないだろうか。実際には、地元の人ですら分からないくらい多くのゆるキャラがいる自治体もあるそうだ。それでは真の目的の「地域おこし」からずれてしまっている。

ゆるキャラを使って地域おこしすることは大賛成だ。しかし、増えすぎてしまって目的がずれてしまうのには要注意である。みんなから愛されるゆるキャラを作り出し、私は地元の地域おこしに貢献したいと思う。

※ 毎日新聞「みんなの広場」平成25年12月18日（水）掲載

「社会で働くということは」 2年女子

私は先日、学校行事で職場体験に行った。お世話になったのは、私自身もよく訪れるドラッグストアである。まだ学校という小さな社会でしか活動する機会がなかった私は、広い社会で活動することを楽しみにしていた。

初日、私は分からないことばかりで、やりがいなどを感じる暇はなかった。終わる頃にはくたくたになっていた。もっと楽しくて、言われることをやっていけばよいものだと思っていた私の想像は甘かった。体験日数が終わりに近づく中で、少しずつの達成感を感じられたものの、働くことの大変さが身に染みだ。

私はとても大切なことを学んだのだと思う。仕事は大変、それだけではない、社会で働くということは、それだけの責任や意志が必要であることだ。また自分の未熟さも痛いほど感じた。もう一度、社会で働くようになるまで少しでも成長できているよう、今を精いっぱいがんばりたい。そして、家族のために働いている両親に心から感謝したい。

※ 東京新聞「発言」平成25年12月18日（水）掲載

「差別発言は自分に返る」 2年女子

最近、ヘイトスピーチ（憎悪表現）を繰り返す外国人排除・差別デモの報道を聞いて考えたことがある。

私はイタリアで生まれ、そこで外国人として九年半を過ごした。小学校からインターナショナルスクールに通い始め、多くの国の人と交流してきた。それぞれの国に素晴らしい文化があり、みんな自分の国に誇りを持って生きている。

世の中に異文化があって当たり前なのだ。だから私はヘイトスピーチという行動に疑問を抱く。自分とは違う国の人を集団の力で否定する。まさに世の中でやってはいけないとされている「いじめ」ではないか。

そんな人たちに、私は言いたい。別の国に行ってみてはいかがだろう、と。そこで、あなたは正真正銘外国人だ。そして同じことをされたらどうだろう。異文化の人を否定すること。それは自分自身も同様に否定されても良いと言っていることに等しい。

日本に住む自分ではなく世界に住む自分を意識すれば、自然に考えが変わってくるのではないだろうか。

※ 毎日新聞「みんなの広場」平成25年12月19日（木）掲載

「時代を超えて伝わる思い」 2年女子

最近、漫画などの影響で人気のある百人一首。私たちの学校でも学年別で大会が行われる。百人一首が今でも人々に愛されるのは、歌に人を納得させ、共感させる力があるからだ。たった31文字にこめられた思いは時代を超えて人の心に届くのだろう。

しかし、人気といっても歌の表面しか見えていない人も多いと思う。和歌には、風景の歌や人間関係の歌がある。その裏に隠された作者の思いや目に映ったものを読みとることができて初めて、その歌の内面を知ることができる。800年も前に集められた和歌に秘められたエネルギーは私たちに力を与える。

作者の考えに共感したり、歌の意味に心が響いたり。現代の文章にはない魅力が和歌にはある。そんな和歌を私たちはもっと知るべきだ。私はそのことを意識して、百人一首大会に挑みたい。

※ 東京新聞「発言」平成25年12月20日（金）掲載

「表情使って通じ合える」 2年女子

学校の授業の一環として先日、保育園で職場体験をした。1日目は、ゼロ歳児のクラスの担当だった。部屋に入った瞬間に、たくさんの赤ちゃんが寄ってきた。今にも泣き出しそうな目でこちらを見てくる子、「あー」と言いながら物を渡してくる子などがいた。赤ちゃんたちは、「ごはん」や「おむつ」など具体的な単語は使えない。だから、「あ」や「う」などを使って話している。最初は何を言っているのかわからなかった。でも、彼らの表情や声の調子に気を付けてみると、何を言いたいのかわからなくなった。

通じ合えた気がしてうれしかった。言葉が通じないというと、赤ちゃん以外に外国人が思い浮かべられる。でも、今は便利な時代で翻訳アプリを使えば、内容は一瞬で伝わる。だが、私はカタコトでもいいから自力で話を伝えたいと思った。

表情やジェスチャーを使えば、相手に理解してもらえるのではないか。それが通じれば、互いの距離が縮まったように感じられると思う。一歩踏み出すのが大事なことだ。

※ 東京新聞「発言」平成25年12月24日（火）掲載

「便利さへの感謝改めて」 2年女子

近年急激な成長を遂げ、とても住みやすくなったこの世界。さまざまなことが便利になりうれしいとも感じるが、私はこのごろ危機感を覚える。便利な物に気を取られ、一番大切な「感謝の気持ち」を忘れていないだろうか。実は私も忘れていた一人だ。先日の職場体験のことだ。私は図書館におじゃまし、職員の仕事を身近で見た。そこで知ったのは、「私たちが普段当たり前に使っているところは、全て人の手によってつくられている」ということだった。館内が綺麗で当たり前、安全で当たり前、そう思っていた自分がとても恥ずかしかった。

「便利なのは当たり前」。そう思っている人は、私以外にもたくさんいるのではないだろうか。私は、その考えを見直すべきだと思う。今日の朝ご飯を作ってくれたのは、学校をいつも掃除してくれる人は…少し思い出だけで、自分がここにいられるのは、多くの人の助けがあってこそと思えるはずなのだ。

※ 東京新聞「発言」平成26年1月8日（水）掲載

「命を尊重していじめ絶とう」 1年男子

東京都足立区で、中学3年生の男子生徒がいじめられ自殺した。他の生徒の多くもいじめの存在を知っていた。黒板にはいつも悪口が書いてあった。なのに、教師はいじめの存在に気付いてはいなかったようだ。

このようなことがあっても、他の学校の生徒は人ごとと思って軽視していないだろうか。いじめによる自殺が相次いで起きるのは、そのためだ。自分の身近なところにも起きているにもかかわらず、人をいじめている自分を見ないようにしているのだ。

いじめによる悲劇をなくすには、いじめをしている自分と向き合い、自分の行動を見直すべきだ。そして自分や相手の命を尊重するべきである。命の重みを考え一つの命の大切さを知ることが、いじめの芽を摘み取ることだと思う。

※ 毎日新聞「みんなの広場」平成26年2月2日（日）掲載

「やさしさと愛と歴史と」 1年女子

私は校外学習で、古くから伝わる日本のいろいろな歴史を知ることができた。その中でも心に残ったことが一つある。それは、浅草寺を訪れたときのことだった。私たちの班は8時半と早い時間に着いた。だが、すでにかなり大勢の人がいた。浅草寺は、日本の「和」そのものだと思うくらいにすばらしかった。でもそれ以上に、仲見世通りもすごかった。私は初めて行ったのでよくわからなかったが、朝からにぎわっていてとても楽しかった。

さらに、そこでは人の「やさしさ」を感じることができた。店のおばさんが、私たちにサービスをしてくれたり、浅草寺・仲見世通りのことが、よく分かるようにパンフレットをくれたりした。そんな仲見世通りは、人の「愛」であふれていたと思う。

私は、この校外学習で、古くからの歴史とともに、人の「やさしさ」や「愛」を知ることができた。この大切な心を歴史とともに伝えられたらいいと思う。

※ 東京新聞「発言」平成26年2月19日（水）掲載

「和菓子のよさ 外国に発信を」 1年女子

先日、校外学習で浅草・上野を班でまわった。最も楽しみにしていた浅草の仲見世で、多くの人が足を止めているお店があった。芋ようかんのお店だ。いったいどこに魅力があるのかと思い、食べてみた。

まず、パッと見た時に、きれいな淡い黄色が印象に残った。サツマイモをあまり食べない外国人でも食欲をそそられるだろう。次に実際に食べてみる。甘さは控えめで、サツマイモをそのまま食べているような素朴な味だ。このおいしさは、添加物など一切入れずに、砂糖、塩だけで作っているからだろう。

このように見た目もよくほどよい味が芋ようかんの魅力だと思った。日本の和食が世界無形文化遺産に登録されたが、芋ようかんなど和菓子の素晴らしさも、外国にアピールしたい。

※ 毎日新聞「みんなの広場」平成26年2月20日（木）掲載

「メロスのような友情のために」 2年女子

国語の授業で、走れメロスを読んだ。内容は少し知っていたが、じっくり読んでみることで新たな発見があった。それは「友情の強さ」だ。メロスの人質になってくれという願いに対し、セリヌンティウスは「無言でうなずき」という文があるが、私だったら友のために命をかけられるのか、と思った。

きっと、誰に人質になれと頼まれても無理だ。だから私は、メロスとセリヌンティウスの2人のことを、すごいと思った。そして、自分もそんな親友がほしいと思った。友達はあるが、命をかけられるほどの友はまだいないと思う。

人を信じるには、自分も信頼してもらえる人間にならなければいけない。すぐにできることではないが、だからこそ普段の行いが大切だと思う。時にぶつかり合い、けんかもするかもしれない。それを乗り越えてこそ信頼が生まれると思う。

※ 読売新聞「気流 [U-25]」平成26年3月18日（火）掲載

「落語家 動き細やか」 1年女子

落語を初めて鑑賞し、語り手の細やかな動きに驚いた。演じる役によって手を置く位置や視線を変えていたのだ。そばを食べる演技は、本当に食べているのではないかと錯覚してしまうほどで、音も動きも本物そっくりだった。

観客の私語で少しざわついた時があったが、語り手は注意を与えながら笑いに変えていた。逆に、語り手が観客に質問を投げかけて笑いをとる場面もあった。

聞き手の反応を見ながら語りを繰り返す。そんな魅力にあふれる落語を、また身近で見たい。

※ 毎日新聞「みんなの広場」平成26年3月19日（水）掲載

「日本語の美しさを知った」 1年女子

言葉を探検するという国語の授業があった。学校の図書館を使って、誰も知らないようなおしゃれな言葉を探し調べる授業だ。国語辞典をめくっていると、「一縷（いちる）」という言葉が目にとまった。何となく言葉の響きが気に入り、調べようと思った。ひとすじの糸という意味で、語源は一本の細い糸である。特に私は「一縷の希望」という例文に心を奪われた。ほんのわずかにつながっているという意味に心を揺さぶられた。

私はこの学習を通して改めて日本語の美しさを学んだ。声に出すとより一層響きのきれいさを実感でき、心地よく感じられた。さらにこの言葉の繊細な意味にも魅力がある。日本人として誇らしく思うとともに大切にしなければならぬと身にしみて感じた。きれいな日本語は私たちの心もきれいにしてくれる。まるで優しい気持ちになれる魔法のようだ。今回の授業でたくさんの日本語に触れることができ、日本語のよさに気づいた。

※ 毎日新聞「みんなの広場」平成26年3月21日（金）掲載

「多くの人に聞いてもらうため」 1年女子

警視庁がアナウンスの技量を競う大会の様子を公開した。雑踏警備などの際に群衆が混乱しないように臨機応変に対応し、誘導しなければならない重要なアナウンスである。昨年優勝したのは「DJポリス」と評判になった警察官だ。DJポリスはDJのようにユーモアたっぷりに誘導し、群衆の気持ちに寄り添った言葉やその場の雰囲気に適した呼び掛け方をする。そのような言い方だったら多くの人が受け入れ、行動しやすいのも納得できる。

私は学習発表会の時に司会をやったが、注意してもなかなか聞いてもらえなかった。その時、多くの人に話や注意を聞いてもらうのは難しいと感じた。DJポリスのようにユーモアがあってはっきりした口調だったら聞いてもらえたかもしれない。これからは言い方を工夫して、自信を持って発表や発言ができるようにしたい。

※ 毎日新聞「みんなの広場」平成26年3月23日（日）掲載

「いじめや差別をなくすために」 1年女子

道徳の授業でハンセン病について学習した。私はハンセン病の名前すら知らなかった。ハンセン病はらい菌に感染することで神経に障害が起こる病気だ。感染症ではあるものの感染力が非常に弱く、感染することはごくまれだった。

しかし、昔の日本では間違った知識が広まり、感染を恐れた国は患者を療養所で暮らさせたり、子供を産めないようにしたりした。こうした対応が世間に広がり患者は厳しい差別を受けた。なんてひどいのだろう。こんなことになった原因は間違った情報が伝わったことにある。なんとなく伝わった情報をうのみにして人々を傷つけてしまった。とても悲しいことだ。

このようなことは日常でもあるのではないか。放射能の影響を恐れて福島産の野菜や魚を買わない人がいたり、学校である子の情報が広まっていじめに発展したりしている。

間違った情報を信じず、自分で知ろうとすることでいじめや差別をなくすことができると思う。